

島嶼学概論 I (硫黄島研修)

農学部生物生産学専攻果樹研究室 修士1年 名取祐太

学籍番号：3415810111

『硫黄島の概要』

硫黄島は、周囲 14.5km、面積 11.7km²の島であり、特産としてはつつじ、椿が挙げられる。また硫黄岳がそびえ立ち硫黄が噴き出ている。そのため硫黄島周辺の海域は、海の色が硫黄でターコイズブルーまたは茶色になっており、海中では酸性海域に生息できないサンゴが適応して生息している。また硫黄島は、東西 20km、南北 17km におよぶ鬼界カルデラに囲まれた島でもある。また硫黄岳は、アカホヤが噴火した後に成長したとされており、その当時の噴出物は、鹿児島県の大隅地方まで伝わり、硫黄島でも地層から確認することができる。このような特有の条件が揃う硫黄島には、地質、海洋をはじめとする多くの研究者が訪れている。

現在、三島村では、研究者から得られた知見や環境条件を生かし、「地球と遊ぶ・学ぶ・稼ぐ」をコンセプトとしたジオパークが設計されつつある。科学的にみて重要また美しい地質遺産を持つ硫黄島に新たな観光名所ができようとしている。

『現在の問題点』

硫黄島では移住すると、50万円または子牛一頭のキャンペーンを行って、島の人口増加を図っているものの、人口が増えない。また島の特産といえば椿であり、自然をまわるツアーが確立されていないことや渡航で鹿児島市内から硫黄島まで4時間かかるので観光客数も減っていることが問題である。

『問題点に対する改善策』

今回、私は硫黄島に行って「もしも地質や海洋の科学者だとしたらとても興味深くまた訪れたいと思うが、観光客としてはまた来ることはないだろう」と感じた。また島に行き楽しんだからといってその人がここに住みたいと思ってくれる人は数少ないと思う。硫黄島での椿は、人に仕事を与え、島の特産物を作る面では良いものだと感じた。しかし車からの椿園をみたところ、樹冠が高く、今後高齢化が進んでいく中で、労力がかかると思われる。そのため、今植えてあるものに関してはなるべく樹冠を低くして労力化を減らすことや特産として出すならば椿の収量増加を考えた方がいい。また今から椿を植えるなら計画的密植栽培を試してみるのもいいかもしれない。また椿を加工して売っていくのであれば、他の島でも椿油は作っている例があるので、売る場所を考えたり、よりうまいブランディングを考えたりすることが重要であると思う。売る場所は、三島行の船の券売所で売ってみたり、また大きくビンにして椿油を売る前に、椿油であったら小さいアメニティー用にして硫黄島に来てくれた観光客の方に渡してみたりすることで、もっと椿油を作っているという宣伝にもなると考える。

また椿のみの生産では、仕事の幅の減少かつ船が止まった際、食糧問題に陥ると考える。

そのため、第2、第3の自給品目が必要となってくると考える。硫黄島では、酸性雨が降り、農作物もビニールハウスのような環境にしないと生育不良になる。またおそらく、硫黄島の土壌が酸性であろうことから、ツツジ科のブルーベリーやツバキ科のチャなど生産していくことがよいと考える。また椿自身残すのであれば、島内の品種間で交雑すると遺伝子的に均一になってきて、島でもし病害が発生した時に耐性がなく、皆枯れてしまう可能性もあるので別品種と交雑したものを植えていくことも重要かもしれない。